Satsumaその他

——ことばの旅*——

清　水　克　祐

話のまくらに，井上ひさし氏の論考の一部を引用したい。

ヒトをヒトたらしめたのは疑いもなく言葉である。さらにヒトはその言葉を発展させて文化をつくり出した。こうしてヒトは「言葉にのせて文化を伝える」という遺伝外の情報伝達に成功した。これに加えてヒトは文字を発明することで，それまでの聴覚にたよった伝達（＝話し言葉）の致命的な弱点であった伝達の瞬間性を永続性のあるものに変えた。（略）[1]

氏はこういうことから，活字崇拝が敗戦当時の日本語の状況であるとし，それから40年たった今，日本語はどうなっているか，を分析する。

これを引用して，私の言いたいことは，ことばは文化であって，ことばと文化のように併列または対比されるものではない。

さらに言えば，ことばは世界の鏡である。[2] そしてその命題は次のようにパタン・プラクティスすることができる。

日本語は世界の鏡

中国語は世界の鏡

ハングル語は世界の鏡

⋮

英語は世界の鏡

＊本稿は，去る昭和60年1月24日，全商英研栃木県本部での講演の一部に加筆したものである。

仏語は世界の鏡
独語は世界の鏡
ロシア語は世界の鏡
⋮
各言語はそれぞれに世界の鏡なのである。

では，日本語と中国語と英語と…の差異は何か？　その差異は，今は，数学用語を用いて parameter パラメーターである，と言っている。訳せば媒介変数，助変数。もっと俗に言うと，助変数的特徴をもっている要素，特徴的要素，ということになる。

日本語 the Japanese language から，あるいは英語 the English language から（ともに定冠詞つき），それぞれそのパラメーターを取り去ると，「言語」language（無冠詞）に還元してしまう，という考え方である。

今日，コンピューターを用いて，日本語⇄英語だけでなく，相当に複数の言語間で，機械翻訳が行なわれている。その方法に 2 つあって，そのひとつは，日本語と英語と，ともに自然語を直接ぶつけ合って，その語い・文法・シンタックスなどを意味をふまえて分析してデータベースを作る。日本語と英語はともに文法研究が進んでいて，その成果を利用しやすいと思われるが，語族がかけ離れている場合，実にやりにくい。（考えてみると，学校での外国語教育はこのやり方でやっているのだ。他の自然語すなわち外国語を学ぶことの意義はきわめて大きいが，非能率・非効率であるのが自然である。）

もうひとつのやり方は，各自然語の翻訳を直接しないで，英語・独語・仏語…日本語・中国語などにわたる一種の中間言語・機械言語 a univessal language（不定冠詞つき）を設定して，自然語をそれに還元してから，別の自然語に直す。中間語の設定がうまく行くと，これによる翻訳は効率がよい。電子工学者たちは，方法論からも，また実際の効果

からも，このやり方をよしとしている。

近ごろ，英国の言語学者 Randolph Quirk 教授が The Nuclear English[3] なるものを提唱された。自然語として英語そのものを学習の対象とすると，特徴的要素がありすぎて学習困難となっているから，その subset 部分集合を——これが「核英語」——まず学ぶようにするというもので，先の電子工学的方法と二重写しになって興味深いが，言語学者や言語教育家の中で反対をとなえる人は少なくあるまい。しかし，いずれにしても，ことばそのもののとらえ方，また言語教育のあり方について，再考せざるを得ないポイントを含んでいることは間違いない。

ことばは旅する。ことばは流れる。流れてどこに行くか。デンマークの言語学者 Otto Jespersen に *Growth and Structure of the English Language* (1948[9])，また *Language*：Its Nature, Development and Origin (1922) の著書があるように，ことばは成長し，英語は発達している，とは言えるが，それがすべて「進歩」なのか，「ソフィスティケーション」であるかどうかは，一概に言えない，と思う。

OEDS (＝*Supplement to the Oxford English Dictionary*) の編集長 Robert Burchfield はその著 *The English Language*[4] の中では，英語は世界共通語としての地位を確立したが，世界各地で，英語はただ disperse する（分化・分散する）と述べ，この視点で英語ということばの流れととらえている。

米国の時事週刊誌 *Newsweek* は1982年11月15日号で "English, English Everywhere" を特集し，世界各地で英語が学習されている現状を報告して，最後の所で，バーチフィールド氏の発言を引用して，次のように締めくくっている。

> But, English does have one possible mortal enemy——itself. "Just as Latin had broken up into French, Italian and so on," says Burchfield of the Oxford English Dictionary, "I think that English

is gradually breaking up into unintelligible varieties. Of course, the process could take centuries."（しかし，英語にはあるひとつの予想される致命的な敵があり，それは何んと英語自身である。「ラテン語がフランス語やイタリー語その他に分化したがごとくに，英語も序々に相互にわからぬ異種に分裂して行く。この分化の過程はもちろん数世紀かかろう」）

＊　＊　＊

以下は雑学的にことばの奇妙な旅をいくつかたどってみる。

1)　*satsuma*＝みかん

日本の英語教育の大先達岡倉由三郎師の有名なことばに，「馬をさして馬といい、鹿をさして鹿と言う。これが世の中のならわしであるが，馬をさして鹿といい，鹿をさして馬という，これを馬鹿という」がある。みかんをさして satsuma とは？　なぜだ!?　そのプロセスはまだわからぬが，satsuma が英語の中に定着したのはまぎれもない事実である。

Loose-skinned oranges (*Citrus reticulata*) include mandarins, tangerines and satsumas,... The satsuma was originally Japanese, very small; it is hardy, standing quite a bit of cold compared to other citruses, and has very few, if any, seeds.——Tom Stoppard, *The Cook's Encyclopaedia* (1980)（皮がすぐむけるオレンジにマンダリンとタンジェリンとサツマがある。サツマはもと日本産で，とても小さい。痛みにくく，他の柑橘類にくらべるとかなりの寒気にももつ。タネはまずない）

英語辞典には Webster International[3]（1961）に初めて出たが，COD の第 6 版（1976）にこう出ている。

1. Satsuma (ware), cream-coloured Japanese pottery. 2. (satsuma) kind of mandarine orange originally grown in Japan. [*Satsuma* province in Japan]

これらを踏まえて，研究社『新英和大辞典』第5版（1980年）には，次のような解説までつけてある。

1．薩摩（さつま）焼き《日本の最も有名な製品としてヨーロッパで誤って見られてきた磁器の一種；Satsuma ware ともいう》

2．【園芸】ウンシュウミカン（*Citrus unshu*）《鹿児島県原産；satsuma mandarin, satsuma orange ともいう》。

講談社発行の英文版日本事物事典 *Encyclopedia of Japan*（1983）には Mikan の項で，ミカンはしばしば Satsuma orange, やや不正確なから mandarin orange と言われる，の記述がある。

Satsuma は立派に英語となったが，これを日本に逆輸入して，みかんを「サツマ」と言うようになるかどうかはわからない。Satsuma の複数形は satsumas. 冠詞もとる。これが英語のパラメーターである。

2) *satsuma* 薩摩焼

前述のごとき研究社大英和では薩摩焼について，めずらしい注記がある。これを裏付けるがごとく，かの大百科事典 *Encyclopedia Britannica*（1980）に次の記述がある。

A typical product of the [19th] period is the so-called Satsuma pottery, most of which was not made at Satsuma, but at Kyoto, and was then sent to Tokyo to be decorated especially for export.（この時代の典型的な製品にいわゆる薩摩焼きがあって，その大部品は薩摩でなく京都で製造され，それから東京に送って，とくに輸出用に飾りつけをした）

今も昔も，悪徳商人がいるもので，外国で人気を博した薩摩焼きの模倣品を作っては，ハイ，これが satsuma ですと売りさばいたのである。かくして satsuma は悪名高く英語に残ったわけである。

明治維新になる前，1862年にロンドンで国際博覧会[6]が開かれ，島津の殿様は日本陶器の逸品を展示した。これが専門家たちの，とくにイギ

リスの陶器家たちの注目を浴びることになった。

19世紀後半，北ヨーロッパでは，日本の美術工芸に対する興味関心が高まりつつあった。これがヨーロッパ人の Japonism 日本趣味である。そこへ正真正銘の日本陶器が現われて，絶大なる衝撃を与えずにはおられなかったのである。

現在でもイギリスのアンティークショップに行って，satsuma と言えば，象牙色の素地に五彩の綿模様を施した焼物の壺を持ってくる[7]。みかんの satsuma も焼物の satsuma もイギリスでは今や固有名詞の域を脱して，普通名詞化されているのである。

3) *cereals*≒コーンコレークス

研究社『大英和辞典』には，3穀類を用いた朝食用の加工食品，セリアル食品《オートミール・コーンフレークスなど》とある。しかしセリアル食品という言い方は日本語で熟しているのか，いまだ知らない。荒川惣兵衛『外来語辞典』（昭和45年，31版）には

シリアル [(ラテン＞英＞米 cereal] 《ローマ神話の農業の神ケレスより》穀物(の)．穀物食．☞「シリアル（強化澱粉）」『文芸春秋』1958.4

とある。日本語にならない英語，英語にならない英語，というものがどうしてもあるのであって，cereal はその一例である。ことばのほうは難航しているが，実物の方は，日本のこどもたちもかなり朝食に食べているケロッグの「コーンフレークス」がずばりその一種なのである。そして当のケロッグは各商品の箱の上に，小さく，朝食用穀類調製食品（朝食シリアル）と表示している。

昔，世の中がのんびりしていたころは，朝食に何を食べるかで，一般の人々は思いわずらわなかった。前の晩の残りを食べる人もあり，また伝統的なオートミールを食べてすます人もいた。ただこのオートミールは調理するのに前の晩からかからなければならなかったし，また熱い

オートミールは，朝，時間をかけなくては食べられるものではない。

19世紀の中ばころになって，世の中のテンポが少しずつ早くなり，人々は朝食を早目に食べるようになる。こういう life-style の変化が，結局，breakfast cereal や，その他 fast food が求められることになった，と言えよう。cereal という単語ができたのも19世紀になってからである。

スコットランドで oatmeal porridge を作るのに，古くからしきたりがあったらしい。

The custom was always to stir porridge clockwise, never the other way, with a straight wooden stick rather than a spoon.[8]（しきたりとして，常にポリッジを時計回りにかきまぜ，その逆はしないこと。まっすぐな木の棒を用い，スプーンでかきまぜないこと）

こういう伝統的な食品も，現在は資本力のある食品加工業の製品に押されていると言える。

Porridge has regrettably been largely ousted by nastier breakfast cereals, even in Scotland.[9]（残念なことにポリッジは味のもっとひどいブレックファーストシリアルに大いに追い出されている——本場のスコットランドでさえも）

「悪貨が良貨を駆逐する」Gresham's law グレシャムの法則のひとつの見本と言えよう。

4) *hamburger* ハンバーガー

Hamburg ともHamburg steak とも言うが後者を略したのが hamburger である。字面からすると，ドイツの海港ハンブルグに由来するようであるが，現地には *Deutsches Beefsteak* というミートパティはあるが，アメリカ式ハンバーガーとは似て非なるものである。ドイツから米国へ移民した人たちがこの種の食物を導入したのは事実らしいが，この名は misnomer 誤った名称である。（ついでに *Hamburger Aalsuppe* ハンバーガー・アールズーピーという名の料理がハンブルグにあるが，ウナギの

スープである）

米国のこどもたちはハンバーガーが大好物。母親たちは一日に一度は肉をひいて，ハンバーガーを作る。これを 'Daily Grind'（毎日お決まりの肉ひき）と言う人もいるくらい。しかし，安直なハンバーガースタンドがあちこちにできると，それになじみになる機会がでてくる。そのうちにこどもたちは，外食のハンバーガーがおいしくて，うちのはまずい，など言い出す。そんなことはないと母親は思っても，知らず知らずのうちに味付けのフィードバック（軌道修正）をして，マクドナルド風の味に近いのを作ったりする。味の規格化・一律化を招くたいへんなげかわしい風潮だ、と指摘した評論家もいた。[10] これも「悪貨が良貨を駆逐する」の例とも言えよう。

最後に，hamburger という語について，おもしろい現象に，もとの地名の Hamburg の意識が米国人の中でうすれてきて，さらにこの語を異分析して ham（ハム）＋burger（バーガー）とし，さらにその第一要素を変化させて，*beef*burger, *pork*burger, *cheese*burger など多様の食物を作っていることである。

ことばは，時間的にも空間的に旅をする。さらに，ことばは一人旅をもする。そのいくつかの例について考察してみた。

Notes

1．朝日新聞昭和60年１月11日付夕刊「今どこにいるのか――日本語」
2．拙稿「ことばは世界の鏡」『大塚フォームラム』第１号（大塚英語教育研究会，昭和58年10月）
3．R. Quirk, *Style and Communications in the English Language* (1982)
4．R. Burchfield, *The English Language* (1985)
5．この食物辞典の著者は，本職はドキュメンタリ映画監督で，取材で世界各地に行くと，必ず現地の魚市場や青物市場をのぞいて，研究する奇特な人である。

6．Siegfried Wichman, *Japonisme* (1981, Harmony Books, translated from the German) なお，60年1月24日，NHK 教育テレビで，『万国博覧会・その歴史と役割「“ニッポン”の登場・1862年ロンドン」』が放送されたが，その日に出張したため，未見。

7．北広次『ミスターようろっぱ』（新声社）

8．David Mabey, *In Search of Food*——Traditional Eating & Drinking in Britaim (1978)

9．Tom Stoppart, *op.cit.*

10．この項 *Saturday Review* の記事によるが，校舎移転のため，文献が手許になく，クレジット不備。